

日見子たちの城

唐瀬
光

この物語はフィクションです。登場する個人、団体、自治体等は、現実の個人、団体、自治体等とは一切関係ありません。

■ 日見子たちの城 目次

第一章	出会い	5
第二章	桜風 <small>さくらかぜ</small>	59
第三章	新性人 <small>しんせいじん</small>	135
第四章	西の森	201
第五章	聖婚 <small>せいこん</small>	269

第一章 出会い

捕らわれ人が、敵の険しい山城に向かつて一步一步引かれていく。そのような暗い感覚に襲われた。道の片側は切り落としたような断崖。首を伸ばして崖の下に目をやれば、そこには民家の屋根が遠く近く樹木の間に見え隠れしていた。

もう一方の側には、コンクリートの重厚な塀が垂直に立ち上がり、坂道に沿って延々と続いている。身を反らして塀の上端を見上げると、そこには鋭い鉄の棘トゲがびっしりと並んでいた。

それは、もはや単に塀と言うより、城壁と言ったほうがピッタリする。その灰色の重い壁は、周囲の社会を激しく拒絶しているように見えた。きっとこの中は、常識の及ばない異世界に違いない。

ぼくは、言いようのない不安に苛まれながら生活用具のぎっしり詰まったりリュックを背負い、重い足取りでその道を登って行った。

坂を登り切った所に頑丈な鉄格子の門がそびえていた。ぼくの三倍の高さはあるだろうその門は、今ががっしりと閉じられている。

門の内側には交番のような建物があって、数人の警備員が詰めていた。よく見ると、みんな女だ。

(まあ、ここは女のはいる所だからな。警備係が全員女でも不思議はないか……)

鉄格子の門に近づいて、そこに立っている警備員に入園許可証を渡した。すると彼女は、チラチラと許可証に目を落としながら、ぼくを頭からつま先までジロジロ眺め回した。それからようやく、首をかしげながらも端の潜り戸を開けてくれた。

門をはいると、すぐ建物に連れ込まれた。持ち物検査があるという。建物の中では、濃紺の警備服に身を包んだオバサンやオネエサンがテレビのモニターを眺めていた。十数台のテレビには、塀とその周辺らしい場所が映し出されていた。

部屋の中央には、ベルトコンベアーのついた機械が置いてあった。それは、空港にあるような危険物探知機によく似ている。

ぼくは、部屋の奥から出て来た体格のよいオバサン警備員に、持っている荷物をその上に置くようにと言われた。

彼女の指示に従って肩からリュックを下ろし、トレイの上に置く。するとそれは、ベルトに乗って機械の中を無事通り抜けた。その中にはナイフやハサミがはいつているというのに……。

次は、ぼく自身の番だ。一人がやっと通れるぐらいの狭い枠をくぐるや、たちまちブザーが鳴りランプが点滅した。すぐオバサンが服を点検する。そして、ジャンパーのポケットから白い携帯電話を掴み出した。

「ケータイは持ち込み禁止だと、書いてあったでしょう」

オバサン警備員は、ぼくを一睨みしてから、「規則よ」と言って、それを頑丈そうな木の箱に入れ、しっかりと鍵をかけた。そして、「預かり証」なる一枚の紙をくれた。

「あんたが、ここを出る時に返してあげる。まあ、三年先になるかねえ」
部屋にいる者みんなが笑った。

ぼくは驚愕きょうがくした。携帯電話は命の次に大切なもの。ケータイのない生活なんて考えられない。それを取り上げる、この規則つて……。

これまで漠然とつづっていた不安感が恐怖にまでレベルアップした。ぼくは、いきなり卓上のリュックを掴むや無意識のうちに外に飛び出していった。

「待ちなさい！」

呼び止める声が聞こえたが、構わず門に走る。端の潜り戸を開けようとしたが、すでに鍵がかかっていた。門をよじ登ろうと鉄格子に取りついたところで、追いかけて来た大柄なオバサンにガシッと押さえられた。

「あんた、ここにはいるために来たのでしょうか。なんで逃げるの？」

彼女は女とは思えない力で、ぼくを鉄格子から引き剥がした。

「それに、なんだい、その格好は。制服はどうしたの？ 制服を着てなくちゃあ、ここは通れないよ。規則だからね。「案内」に、そうあったでしょう」

腕を掴まれ建物の前まで引き戻された。

建物の窓ガラスに、ぼくの姿が映っていた。黒いキャップ帽に、薄い青色の丸いサングラス。こげ茶の革ジャンに、擦り切れただぶだぶのジーパン。いつもの自分の姿だが……。

「まあ、知らなかったのなら、しかたがないね。今度だけは通すけど、次はダメだよ」

怖い目でジロリと睨まれた。

しかたなく、重いリュックを背負って広い庭を一人よろよろと歩いた。後ろを振り返ると、警備の女たちが僕を指差して互いに笑い合っていた。

塀の内側は、とてつもなく広かった。コンクリートやレンガの建物が立ち並び、その周りを柔らかな若葉を開き始めたケヤキやブナの林が囲んでいる。

中庭の花壇では、カーキ色の作業服を着た数人の女子が、なにかの苗を植えつけている。その傍らを白いトレーニングウェアの一隊が、黄色い声を響かせながら二列縦隊で駆け抜けて行った。

しばらく歩いて行くと、噴水のある小さな池があった。時々水面に水しぶきを上げている。

池の中ほどには、岩を積み上げた小さな島があった。その岩の上に、騎兵の銅像が立っている。それは、ギリシャ風甲冑に身を固め、馬上で弓を引き絞っている小柄な戦士だ。鋭い目、硬く結んだ口元、背になびくマント。よく見ると、胸あたりに二つの膨らみがある。

(女か?)

『アマゾネス』という言葉が脳裏に閃いた。古代に存在したと伝えられている女だけの部族だ。馬を駆り、弓を得意とする、男顔負けの戦闘集団だったという。

(マリア様ならともかく、アマゾネスだなんて。この、お上品で、お淑やかと評判の、お嬢様たちの園に……)

その像をもっとよく知ろうと池の周囲を回ってみたが、文字らしきものはどこにも書いてなかった。

(まつ、いいか)

まずは、今日からねぐらとなる学生寮を探さなくてはならない。池の縁に腰を下ろして、リュックから「舞鶴^{まいづる}女学園入学案内」なる小冊子を取り出す。その校内図を一渡り眺め、頭に寮の場所を叩き込んでから、ようやく重い腰を上げた。

校内があまりに広いので迷子になりそうだ。校舎の間を通過して五分ばかり北の方に歩いて行くと、それらしき建物が見えて来た。中央に七階の棟。その左右に三階建ての白い建物が延びている。まるで、白鶴が大きく羽を広げているかのようだ。

案内図には、中央の棟に、ロビー、食堂、娯楽室などがあり、右側の棟（東棟）には高校生、左側の棟（西棟）には中学生の居室があると書いてある。

その西棟の屋上に、茶系のジャージに身を包んだ少女たちが、鉄柵につかまって下を眺めている。その様子は、まるで電線に鈴なりに止まっているスズメたちのようだ。

ぼくが正面玄関に近づくと、スズメたちが一斉に振り向いた。

皆、一様にキョトンとした表情を見せたが、すぐに顔を見合わせて笑い始めた。

「なあに、あの人。変なの。オトコ？ オンナ？」

彼女たちの「キャッ！ キャッ！」とさえずる声が、寮の玄関にはいるまで聞こえた。

玄関をはいった所に、背丈ほどの靴箱が並んでいた。その靴箱がさらに百個ぐらいの小さな扉つきボックスに仕切られ、その一つ一つには寮生のだろう個人の名前が書いてあった。

ぼくは、自分のボックスがどこにあるか分からなかったので、取りあえずお客様用に入れた。上履きは布団と一緒に宅配便で送ったので、今手元にはない。しかたなく来客用スリッパを拝借した。

スリッパをペタペタさせながら奥の方に歩いて行くと、ロビーらしき所に出た。壁際に木製の長椅子が置いてあり、その横に「受付」と書かれた窓口があった。声をかけようとして中を覗いたが、誰もいない。しばらく待っていたが、出て来る気配もない。

そのうち、急にお腹が痛くなった。今朝から兆候があったが、アレが始まったようだ。急いでリュックを長椅子に置くと、トイレを探しに廊下へ出た。でも、なかなか見つからない。あちこち探し回っているうちに、いつの間にか東棟の一つにはいり込んでいた。

一階の廊下をせかせか歩いて、やっとそれらしき所を見つけた。ドアを内側に開くと、まさにトイレ（もちろん女子用）で、片側に個室がずらりと並んでいる。思わずホッと安堵の息が漏れた。

便器に溜まった紅い血を見ると、いつもながら気分が悪くなる。下腹を眺めると、男なら必ずそこについているはずの突起物がない。しばらく見つめていたが、いくら念じても、こればかりは生えて来るものではない。ぼくは、沈鬱な面持ちでズボンを穿き、ベルトを締め、のっそりと個室を出た。ちょうどその時、隣のドアが開いて小柄な女の子が出て来た。白いジャージのパンツを両手で引き上げながら、長いツインテールの髪をびよこびよこ揺らしている。

その子が、こちらを振り向いた。丸い顔に大きな目。頬ほほにはソバカスを散りばめている。その大きな瞳が、さらに大きく見開かれた。

「きゃあああ！」

彼女が絶叫する。

(おっ、おい、違う、違う)

あわてて両手を振ったが、それがまた彼女を刺激したようだ。

「ぎゃあああ！」

女の子は出口のドアに飛びつくや、それを乱暴に押し開けて廊下に逃げようとした。ぼくは「違う、違う！」と叫びながら追いかける。

彼女は廊下に飛び出る時、戸口の段差につまずいて派手に転んだ。

「おい、大丈夫？」

急いで駆け寄り、彼女の肩に手をかけた。すると、その丸い顔が恐怖に引きつった。

「いやー！ いやー！ やめてー！ やめてー！ 痴漢、痴漢、痴漢よお——」

甲^{かんだか}高い声が廊下の奥にまで響き渡った。

すると、両側の扉がボタンボタンと開いて、中から女子がわらわら飛び出して来た。みんなモップや定規、フライパンなどを握りしめている。鍋のふたを持ったやつもいた。

彼女たちは、ぼくに気がつくと「男！」と叫んで一瞬硬直した。だが、すばやく次の行動に移った。「男、痴漢、変態、きゃあああ！」

逃げ散るかと思いきや、まるで歩兵隊の突撃のごとく、「ウォ——」と雄叫びを上げながら押し寄せて来る。

思わず腰が怯^{ひる}んだ

逃げようとして後ろを振り向けば、そこにも決死の形相をした女たちが数人駆けて来る。これでは、いくら誤解だと叫んでも通じそうにない。

(なにか身分を証明するもの……そうだ学生証……リュックの中)

パニックの中でようやくそれだけ思いつくと、「頼む、通してくれ。通してくれ！」と大声を出しながら、前屈みになって、彼女たちに突進した。

集団の中央が「きゃあ！」と割れる。ぼくは、その隙間に突っ込み、彼女たちを掻き分けながら、なんとか退路を開こうとした。しばらく揉み合っているうちに、人垣が崩れて向こうが見えた。

(しめた！)

ダッシュしようとしたまさにその時、「なに事だ！」と鋭い声がして、周囲がサッと静まった。

声のした方を見ると、廊下の中央に小柄な少年が立っていた。髪を後ろに束ね、白い道衣に黒袴。

右手に竹刀を握っている。

「フン先輩！」

たちまち歓声が起こる。

「せんばあゝい。捕まえてくださあゝい。コイツ男です、痴漢です。オユキが襲われましたゝあ」
ぼくの右腕にしがみついている女の子が叫ぶ。

「男だあ？ 痴漢だと！ この寮に忍び込むたあ、いい度胸だ。おれが、成敗してくれるう」

少年は鬼のように顔を紅潮させるや、竹刀を斜め上段に構えた。そして、「キャ——ア——」と猿のような甲高い声を発して、正面から鋭く打ち込んで来た。

（危ない！）

頭はかろうじて直撃を避けたものの、肩口を激しく打たれ、ぼくは仰向けに昏倒した。帽子もサングラスも、どこかに吹っ飛んだ。

「それ、やつける！」

女たちが、一斉に襲いかかって来る。

彼女たちは、モップやフライパンで情け容赦もなくぼくを打ちすえた。しだいに意識が朦朧もうろうとして来た。

（ああ自分は、ここで、女たちになぶり殺しにされるのだ。思えば辛い人生だった……）
やがて、魂の浮遊する感覚がやって来る。

「やめなさい！」

その時、アルト調の強い声が響いた。加えられていた暴行が止む。

「あなたたち一体なにをしているの？ 一人を集団で苛めるなんて、恥ずかしいとは思わないの！」
頭の上で周囲を叱りつける声が聞こえる。

薄く目を開けると、一人の若い女がすぐ近くに立っていた。卵型の顔、小麦色の肌。その黒い瞳が、怒りを帯びて大きく見開かれていた。

（成熟した顔をしているが、先生だろうか？ でも、セーラー服を着ているし……）

「あっ、アオイ様！」

少女たちが一斉に退く。

「でもアオイ様、コイツ男ですよ。忍び込んだんです」

一人が、ぼくを指差して訴える。

「この子が男？ そうは見えないけど……」

彼女は腰を屈めるようにして、ぼくの顔を覗き込んだ。

「邪魔するなアオイ。寮に侵入した怪しい野郎を退治しているのだ。なにが悪い！」

横から、鬼（小鬼）のように目を吊り上げた少年が叫ぶ。

「ラン、あなたの目は節穴？ 困るなあ、副寮長ともあろう人が。この子のどこが男に見えるの？」

「これが女だって？」

絶句する少年。ざわめく少女たち。

「この顔、この身体。これが男に見える？ ラン、あなたの目は腐ってんじゃないの！」